

## 博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	看護学
学籍番号		院生氏名	松村 香
通学キャンパス	小田原キャンパス		
論文題目	児童養護施設における生活安全感・安心感に関する研究 -尺度開発と尺度活用の可能性の評価-		
審査結果(枠で囲む)	合格 不合格		
<p>&lt;審査結果の要旨&gt;</p> <p>1. 主論文について</p> <p>1) 研究の概要</p> <p>本研究は、児童養護施設で暮らす子どもの生活安全感・安心感向上のためのアセスメント尺度の開発と尺度活用の可能性の評価を目的とし、以下3つの研究から構成された。</p> <p>研究1は、2015年1~4月、関東近郊にある9施設で暮らす子ども388名を対象に、生活安全感・安心感に関する質問紙調査を実施した。有効回答359名を解析した結果、41項目4因子からなる児童養護施設版『生活安全感・安心感尺度』を開発し、その信頼性・妥当性を検証した。</p> <p>研究2では、2016年1~4月に、8施設の子ども308名を対象に、被虐待体験と生活安全感・安心感との関連を検討した。有効回答293名を解析した。結果、被虐待児童は、「他の子どもへの安心感」「職員への安心感と生活空間の居心地」低い傾向が見いだされた。</p> <p>研究3は、尺度の活用可能性を検討することを目的とし、研究2と同様に5施設を対象に、2017年1~4月に実施した。追跡可能かつ有効回答であった176名のうち虐待を受けた経験のある122名の解析において、「他の子どもに対する安全感」の得点が2016年より2017年で有意に上昇していた。虐待を受けた子どもは、尺度を構成する項目-暴力・いじめ・無視等-に対する反応性が高く、調査により、子どもの内省を促進し、生活安全感を高めたと考えられた。実践において、開発した尺度を活用することは、子どもに生活安全感・安心感をもたらす可能性が示唆された。</p> <p>2) 研究方法、論証、論文形式の適切さ</p> <p>本研究の実施にあたっては倫理委員会の承認を得ており、適正な手続きおよび倫理的配慮がなされていた。研究方法は、尺度開発の手順に則っており、前向き調査による2時点の経年変化を検討しており適切であると言える。また、論証ならびに論文形式も妥当である。</p> <p>3) 知見の新規性と価値</p> <p>子どもの養育に課題を抱える家庭が増加する中、児童養護施設における子どもの心身へのケアは喫緊の課題である。本研究の新規性は、子どもの生活安全感・安心感の状態を測定可能な尺度概念として提示し、実践における活用可能性を検証したことである。福祉施設における子どもの健全な成長発達を促す看護の役割を明らかにした点からも、看護学の発展に貢献するものと評価できる。</p> <p>2. 審査経過</p> <p>審査会は2回開催し、研究目的と研究方法の整合性、構成概念の適切性、調査対象の設定理由、研究の限界、看護への提言について加筆修正を求め、適切に修正された。</p> <p>3. 口頭試問</p> <p>口頭試問において適切に回答した。</p> <p>以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	主査	臺 有桂	
	副査	藤田 郁代	
	副査	藤田 千春	